

## 論文

### キリスト教紙芝居における福音的観点からの考察(4) —羊を扱った作品を中心に—

柴田智世

#### 1. 研究の目的

本研究では、キリスト教紙芝居を保育に取り入れる際の一つの方向性を探っていきたい。一般の紙芝居を選択するよりも、キリスト教紙芝居が困難を伴うのは、聖書に基づいて作成されているがゆえに、保育者は、まず聖書を理解するところから始めなければならないという点である。キリスト教紙芝居の物語を分析するには、一般的には、聖書と註解書を読むことから始め、当時の時代考証、物語の意図するところの適切な理解など、いくつかの要素を考慮する必要がある。仮に教材研究を行わず、紙芝居を文面上の解釈のみで読むことにより、子どもから疑問が提起された際に、表面的な回答に終わってしまうことは避ける必要がある。

本稿では、保育者や学生がキリスト教紙芝居を福音的に理解し、保育に活かすための手掛かりとして、作品の意図を詳細に分析していくことを行う。

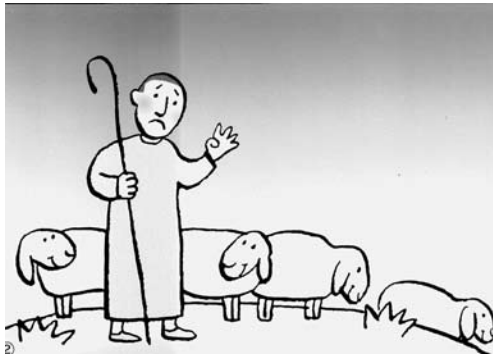
#### 2. 研究の方法

本研究では、羊が聖書中の動物の中で一番多く登場し、キリスト教の園の子ども達に親しまれていることから、羊の話を使った紙芝居4作品を取り上げる。各作品の比較・特徴を考察し、更に聖書の註解書に基づいて、福音のメッセージを探る。

#### 3. 結果

各作品について場面ごとの分析を行った。それらを次の表に示す。

作品 1. 「迷子の羊」 文・大越結実、絵・G・エヴラール、V・グロベ  
 いのちのことは社 CS 成長センター、2005 年〔聖書箇所 ルカによる福音書第 15 章 1～7 節〕

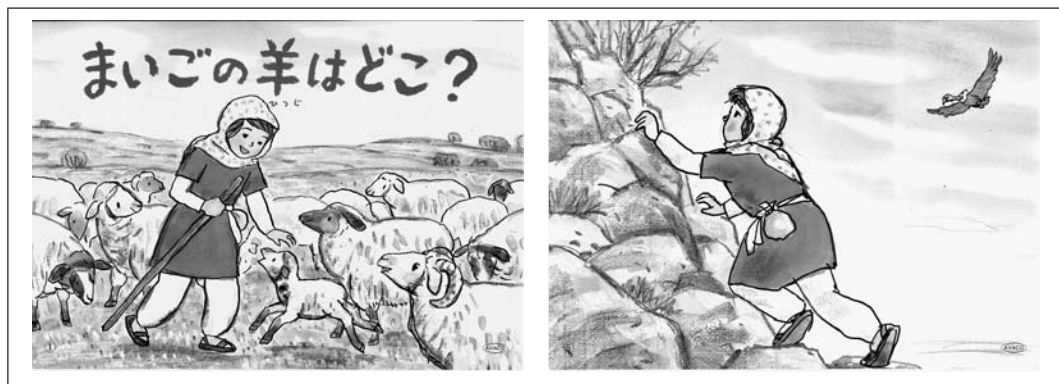


場面	本文より要旨を抜粋	気付いた点
1	羊飼いが羊を放牧している場面である。羊は守られて安心して草を食べている。	⇒冒頭部分で、「よい羊飼って、どんな人のことでしょう。」と読者に質問を投げかけており、話の中に引き込んでいる。
2	夕方になり、帰る準備を始める。羊飼いは百匹全ての羊がいるか数を数えたところ、一匹足りないことに気付く。	⇒羊の数が足りないため、羊飼いは困った様子である。
3	羊飼いは他の羊たちをその場においたまま、迷子の羊を探しに出掛ける。	⇒羊飼いは大変心配そうな表情で、探しに行く様子が伝わる。
4	羊飼いは、「おーい、どこにいるの！」「帰っておいで！」と何度も呼びながら山の上や谷など、羊がいきそうな場所を探すが、見つからない。	⇒羊を心配する羊飼いがクローズアップされた描写である。
5	ついに、岩の陰にうずくまっている羊を見つけて、羊飼いは駆け寄る。	⇒羊がいなくなった理由について、遠くまで遊びに行き、帰る道が分からなくなったためであると書かれている。
6	羊飼いは「ああ、よかった！心配したよ。」と言って羊を自分の肩にのせる。そして、神様にお礼を言いながら家に帰る。	⇒羊飼いは、羊をとがめる言葉は一切言わず、羊を労っている。絵では、お互いが目を合わせて安心している様子が描かれている。
7	家に帰った羊飼いは、羊が見つかり、嬉しくてたまらなかったため、友達を集めてお祝いを催す。 この話のまとめとして、イエス様は	⇒羊飼いと羊、友達と祝いの食卓を囲んでいる。この話の趣旨が読者に伝わるように、イエス様と一緒にいることで私たちは安心できるというキリスト教の伝道のメッセージを理解するこ

<p>「私はよい羊飼いです」と言ったこと、羊を守る羊飼いは、私たちを守るイエス様のことをたとえていることを述べている。</p>	<p>とができる。</p>
<p>考 察</p>	
<p>絵はイラスト調で、非常にシンプルである。読み手である子どもにとっては、分かり易い描き方であると思われる。</p> <p>物語では、羊飼いは姿が見えなくなった一匹の羊を探し、ようやく見つけることができた。その際の羊飼いの言葉や表情は温かく、優しく愛に満ちている。羊を責める態度はみじんもない。羊を責めなかった羊飼いの態度は、悔い改める人を神に招き入れるイエスの態度と同様であると言える。</p> <p>帰宅した羊飼いは、友達を集めてお祝いをする。大事な羊が見つかったため、心から嬉しくてたまらなかったことが伝わる。ここでは羊飼いが99匹の羊を大切にすることと同じように、1匹の羊も愛していることが分かり、人のもっている価値観を揺さぶるイエスのたとえ話でもある。</p> <p>物語の最後で、この羊飼いはイエスを指していることを強調している。イエスが私たちのことを何でも知っており、守って下さる方であることについても記述されている。</p>	
<p>聖書との整合性</p>	
<p>聖書では、イエスによるこのたとえ話が語られることになった背景として、次のような記述がある。パリサイ人、律法学者たちはイエスのことを「この人は罪人たちを受け入れて、食事まで一緒にする」とつぶやいた。それらを受けて、イエスは先の羊のたとえ話を語ったのである。パリサイ人や律法学者は、罪人と懇意になろうとするイエスの態度を批判したのである。しかし、イエスはこのたとえ話を挙げることによって、神とはどのような存在であるのかを彼らに分かりやすく伝えなかったのである。</p> <p>この作品では、よい羊飼いとはイエスのことである、という子どもに向けてのメッセージから、キリスト教の真理に触れることができ、主旨が貫かれていると思われる。</p>	

作品2. 「まいごの羊はどこ？」 文・大嶋果織、絵・藤本四郎

キリスト教視聴覚センター、2001年〔聖書箇所 マタイによる福音書第18章12～14節〕



キリスト教紙芝居における福音的観点からの考察（４）

場面	本文より要旨を抜粋	気付いた点
1	主人公のラケルは羊飼いの女の子である。羊に餌を与え、一匹ずつ優しく関わり世話をしている。	⇒心優しいラケルの様子は、羊に対する愛情があふれており、読者の気持ちを安心させる。冒頭は穏やかに物語が始まっている。
2	ラケルは羊に水を飲ませるため、井戸へ誘導する。井戸のそばには友達のヤコブが待っており、二人で水汲みを行う。	⇒ラケルとヤコブが協力して水を羊に飲ませている。楽しんで働いている様子が伝わる。
3	仕事が一段落し、昼食の時間になる。この時、ラケルは一匹の羊（名前はブッチ）がいないことに気付き、他の羊をヤコブに任せて一人で探しに出かける。	⇒ラケルはすぐに羊を探そうと立ち上がったことから、羊を大切に思う気持ちを読者は感じ取るであろう。
4	ラケルはブッチの名を呼びながらあちらこちらを探す。高い岩山の前にたどり着く。	⇒ラケルは泣き出しそうであることが記述されており、羊を心配していることが分かる。
5	ラケルは目の前の岩山を登り始める。	⇒羊を見つけない一心で、懸命に登っている。
6	ようやく頂上に着いたが、足元の石が崩れ落ち、ラケルも転がり落ちる。	⇒読者への緊迫感が伝わる。
7	幸いにもラケルは、一命は取り留められ、大きな岩の上で意識を取り戻す。視界には深い谷底があり、恐怖感を覚える。その時、下の方で羊の鳴き声を聞く。	⇒ラケルは非常に危険な場所にいながらも、羊の声を聞いて名前を呼ぶ。
8	岩場の下に、うずくまっているブッチを見つける。すぐにラケルは助け出そうとするが、あまりに急な岩場に躊躇してしまう。	⇒ようやく羊の姿を見つけホッとするが、助けるためには岩場を降りなければならないという課題に直面する。
9	ラケルは降りる決心をし、一足ずつ岩場を降りて行く。「神さま、どうかわたしに力をください。」と祈りながら降りて行き、ブッチのいる所にたどり着く。	⇒困難な境遇で、神様に助けを求めるラケルの信仰的な態度が伝わる。
10	ラケルはブッチを抱き上げ、さすりながら優しい言葉をかける。	⇒紙面いっぱいに描かれたラケルとブッチの絵に、読者は安堵感をもつだろう。ブッチには怪我もなく、無事であったことも幸いであった。

11	ラケルはブッチを連れて家路に向かう。山に向かってラケルとブッチが喜び叫び、こだまが響く。	⇒夕暮れ時の太陽と、喜びはねるラケルとブッチの絵に、穏やかな場面が表れている。物語が終盤を迎える。
12	ラケルの両親が待つ家に着く。家族と、羊たちが喜ぶ声が聞こえ、話が締めくくられる。	⇒辺りは暗くなったが、無事に帰宅でき、家族や羊たちに出迎えられることで、ラケルは安心したことであろう。

考 察

絵は水彩画の温かみのある雰囲気で描かれている。

主人公は女の子であり、読み手である子ども達には親近感がわくであろう。話の内容は、起承転結がはっきりしており、流れが分かり易い。冒険的なストーリーであり、子どもは話の先を期待しながら読み進めるであろう。

紙芝居のケースには、詳細に解説が書かれている。特に、羊が非常に大切に身近な家畜であったという記載から、当時の人々の生活を想像することができる。家族総出で世話をし、食用だけでなく、毛は織物、革は袋やテントにも用いられていたことについても触れられ、現代の子ども達にも当時の暮らしを伝えていくと、一層、話の内容に深みが増すと思われる。

同じくケースには「目標」欄があり、この作品の意図するところを念頭において保育に用いることができるため、保育者への導きになる。

聖書との整合性

この物語の土台となっているのは、マタイによる福音書第18章12～14節である。イエスが語っている迷い出た羊のたとえ話は非常に明解である。これを子どもに分かり易く伝えるために、紙芝居の話を創作したと考えられる。

なお、創世記第29章には、同じ名前のラケルという羊飼いの少女が登場している。

作品3. 「わたしの羊を養いなさい—ペテロ(3)—」文・久山隼児、絵・藤本四郎  
 キリスト教視聴覚センター、1986年〔聖書箇所 ヨハネによる福音書第20章1～23節、第21章1～17節、使徒行伝第2章1節～41節〕



場面	本文より要旨を抜粋	気付いた点
1	イエスが十字架上で亡くなってから	⇒冒頭から弟子たちの表情が暗く、重々しい雰

	<p>3日目の朝の場面。弟子たちが、次は自分たちが捕まえられるのではないかと心配している。</p> <p>そこへ、マグダラのマリアが慌てた様子でやって来る。</p>	<p>囲気が絵に表れている。</p>
2	<p>マリアが息を弾ませてやって来る。今朝、マリアはイエスの墓に行ったところ、墓の中は空になっており、死から蘇ったイエスが現れた。イエスは、自分が蘇ったことをペテロに知らせるようにとの伝言を、マリアに告げる。その伝言を受けて、マリアとペテロ、ヨハネの3人は急いで墓に向かう。</p>	<p>⇒マリアとペテロの緊迫したやりとりが伝わる。</p>
3	<p>3人はお墓に着き、中の様子を確認めるが、イエスの姿は見えない。</p>	<p>⇒お墓である洞窟の中を、外側からペテロ、ヨハネ、マリアの3人が慎重に覗いている。</p>
4	<p>お墓の中を確認し、ペテロはマリアに対し、本当に、ここにイエスが立っていたのかと尋ねる。マリアは自信のない様子で答える。</p>	<p>⇒3場面続き、お墓の中を見て、イエスの不在を確認める3人の姿を描くことで、読み手にはこの場面の事実が伝わる。</p>
5	<p>その日の夜、弟子たちで話し合う。本当にイエスが蘇ったのであるならば、弟子たちに会いに来るのではないかと、という点と、ユダヤ人が自分たちを捕まえに来るのではないかという心配をしている。</p>	<p>⇒イエスへの疑問よりも、弟子たちはユダヤ人たちに捕まえられることを非常に心配している。腕組みをする者、膝を抱えて頭を抱える者の様子が描かれている。</p>
6	<p>急に状況が変わり、イエスが弟子たちの前に現れる。弟子たちは大変喜ぶ。イエスは蘇ったことを人々に伝えるようと言うと、姿を消す。</p>	<p>⇒イエスが威厳をもって登場する。弟子たちの驚きは喜びに変わり、明るい雰囲気満たされている。</p>
7	<p>ペテロと数人の弟子は魚を捕りに出かけるが、一晩中かかっても一匹も釣ることができず、帰ろうとする。</p>	<p>⇒ペテロたちは漁を続けることを諦める。</p>
8	<p>その時、「舟の右側に網を下しなさい」とのイエスの声が聞こえる。</p>	<p>⇒ペテロは言われた通りに網を下すと、網に大量の魚が捕れる。</p>
9	<p>岸に上がった弟子たちは、イエスを囲んで朝食を摂る。食事後、イエスは</p>	<p>⇒イエスのペテロへの問いかけは、毅然としており、かつ穏やかである。</p>

10	<p>ペテロに対し、イエスを愛するかと2度尋ねる。</p> <p>イエスの「私を愛するか」との3度目の問いかけに、ペテロはかつて自分がイエスを知らないと言ったことを思い出して不安になるが、イエスを愛することを誓う。</p>	⇒イエスとペテロのやりとりは、弟子たちの前で穏やかに行われている。
11	イエスが蘇って50日目のエルサレムで、ペテロを中心とした弟子たちは、イエスのことを人々に語っている。	⇒朝早くから、ペテロは自信をもってイエスのことを語る。この言葉が、読者への脅かしにならないようにとの、欄外に注意書きが見られる
12	群衆は話を聞いて不安そうにペテロに問いかける。ペテロは、悔い改めてバプテスマを受けるならば、人々は救われると、説き聞かせる。	⇒絵には、ペテロがクローズアップされ堂々とした表情で描かれている。彼の信仰によって裏付けられた、イエスへの希望に溢れている。
考 察		
<p>冒頭の1場面では、弟子たちの深刻な雰囲気の流れ、話が始まっていく。その後、死んだイエスが墓から蘇るといふ、不思議な出来事を経て、復活したイエスが弟子たちの前に姿を現す。常識では想像しがたい出来事が、当時、起きたのだということを、子ども達は紙芝居を通して知る。</p> <p>紙芝居のタイトルには「私の羊を養いなさい」と書かれているが、物語の中には羊そのものは登場しない。イエスの言葉である「私の羊を養いなさい」「私の羊を飼いなさい」が複数記述されている。この具体的な意味について、物語中にはほとんど触れられていない。羊が示すものは何か、単に羊の世話をするという飼育の意味だけでなく、読み手から子どもへの具体的な説明が必要である。</p> <p>紙芝居のケースには目標、解説、使い方が書かれており、読み手の導きとなる。特に、目標に掲げられている、イエスの死によって絶望していたペテロが、その後のイエスの復活を信じ、イエスの証人として成長していく姿は、読み手の子ども達に雄々しく映るであろう。</p>		
聖書との整合性		
<p>本作品は、弟子たちが復活したイエスと出会うペテロの物語である。ペテロは、イエスが大祭司に連行された際、「私はイエスを知らない」と3度言ってしまったことから、イエスへの赦しを求めて複雑な思いが交錯している。紙芝居作品として演じることで、聖書の本文中には表れていない弟子たちの不安さやイエスへの思いを読み取ることができる。</p> <p>このように、ペテロのような弱さを人間は誰でも持っているということにも、読み手は気づくだろう。そして、弱さがあっても、イエスを信じる信仰により生き方が変わるのだという聖書のメッセージを、この作品は子ども達に伝えたいのだろうと思われる。</p>		

作品4. 「まいごのこひつじ」 文・三好浪江、絵・星野紅子  
 日本キリスト教協議会紙芝居委員会、出版年不明 [聖書箇所の記事なし]



場面	本文より要旨を抜粋	気付いた点
1	羊飼いのおじさんが100匹の羊を飼い、毎日、野原で草や水を与えている。	⇒野原の小高いところからおじさんが羊たちを見下ろしてる。群れに気を配っていることが絵から伝わる。
2	リリちゃんという名前の赤ちゃんの羊がおり、おじさんは特別にこの羊に目を配っている。	⇒この羊は安心した様子で、おじさんに身を委ねている。
3	ある日、おじさんは羊たちを初めての新しい原っぱに連れて行く。羊たちは喜んで飛び跳ねる。	⇒羊たちのために、おじさんは柔らかい草やきれいな水を与えたいと考えたのであろう。おじさんも草の上に座り、羊の喜ぶ姿を嬉しそうに眺めている。
4	リリちゃんも、草や水を味わい大喜びである。そして、羊の群れから抜け出し、飛び跳ねながら谷間の方へ走っていく。	⇒純粹であどけない、嬉しそうなリリちゃんが大きく描かれている。
5	リリちゃんはきれいな花を見つけて、花の周りを跳び回る。時刻は夕方に近づく。	⇒4の場面につき、5の場面でもリリちゃんは大きく描かれている。楽しい時間が流れている様子が伝わる。
6	いつの間にか夕暮れ時となる。誰の声も聞こえない森の近くの花園で、とうとうリリちゃんは寝入ってしまう。	⇒思いきり遊び、眠くなったリリちゃんは体を丸めて休む。
7	羊飼いのおじさんが角笛を吹き、音色が風に乗って山や谷へ響く。それを聞いた羊たちは集まり始める。	⇒角笛を吹くおじさんに向かって、羊たちが集まる。



8	羊たちはおじさんと家に帰っていき、小屋の柵を跳び越える。おじさんは羊の数を数え、99匹しかいないことに気付く。	⇒羊の数を丁寧に確認するおじさんの様子が伝わる。
9	おじさんは、残りの1匹はリリちゃんであることが分かったら、99匹をそのまま置いて、大急ぎで今日行った野原に戻って行く。	⇒原っぱにもどったおじさんは、木の下、谷間、小川と、かけずり廻ってリリちゃんの名前を呼び続ける。緊迫した雰囲気と、おじさんの真剣な様子が分かる。
10	暗くなり、星が光り出す。おじさんは真っ暗な崖から谷底を見ると、白いものが動いているのを見つける。	⇒辺りは暗くなり、子羊を探すおじさんの状況が、一層厳しいものとなっていく。
11	おじさんが崖を下りていくと、泣き疲れて声が出なくなったりリリちゃんの姿が見つかる。おじさんに抱かれて、リリちゃんは不安がおさまらず震えている。	⇒無事におじさんに助けられ、読者には安堵感がある。
12	おじさんはリリちゃんに優しい言葉を掛けて撫でる。リリちゃんは、勝手に独りで遠くに行ってしまったことを詫げる。99匹の羊たちも、リリちゃんの無事の帰宅を喜ぶ。	⇒おじさんはリリちゃんを一度も責めることなく、温かく受け入れている。リリちゃんは自分が起こした行動を認めて謝罪する。
考 察		
1匹の小さな羊の様子が無邪気で純粋な気質をもって表現されている。名前もリリちゃんという親しみやすいことから、子ども達は、羊を自分と重ね合わせ、感情移入をするのではないかと。話もテンポよく進み、読み手が引き込まれる書き方をしていることが特徴である。		
聖書との整合性		
聖書箇所は記載されていないが、本文の内容から、マタイによる福音書第18章12～14節、ルカによる福音書第15章3～7節であろうかと推測される。本作品は、聖書の記述に添って話が作られている。		

#### 4. 考察とまとめ

今回分析を行った作品は、聖書の記述に沿った内容構成で書かれていた。作品2と作品3は冒頭に「目標」が掲げられている。これにより読み手は、子ども達に何を伝えたら良いのか、話の核心を明確に把握することができる。また、聖書を子どもの生活に身近なも

のとしていくためには、読んだ後、子ども達との対話を通して話の振り返りや、内容の深まりを味わう時間も必要であると考え。

作品1、2、4に共通していることとして、いなくなった一匹の羊を飼い主が探し、無事に見つかるというストーリーである。羊が見つかった際に、飼い主は羊を叱ることや諫めることは少しもしない。むしろ、羊は温かい飼い主の懐に抱かれて、無上の安心感が読者に伝わる表現である。これは、子どもが誤った行動や人に迷惑をかけた時、大人から叱責されるのではないかという人間的な既成概念を超えて、神様は愛と赦しを与えたもう方であるという、福音的なメッセージを含んでいると思われる。

また、失われた羊を積極的に探しているという羊の飼い主の姿から、神は罪人がご自分のもとに来るのを消極的に待つのではなく、積極的に捜し出すという真理を強調していると言えるであろう<sup>1)</sup>。

筆者は、これまでの一連の福音紙芝居研究（尾上・柴田 2014, 2015, 柴田 2016）において、より聖書理解を深める手立てとして、レギーネ・シントラー著「聖書物語」における分析を行ってきた。本研究でも同様に「聖書物語」を用いることとした。本文では、「道に迷った者がもどるとき」というタイトルで、羊の話（ルカ 15：1～7）と、放蕩息子の話（ルカ 15：11～32）の2つが取り上げられている。

「聖書物語」では、聖書のルカによる福音書 15：1～2と同様に、イエスが見失った羊のたとえ話をういた経緯として、ファリサイ派の人と律法学者たちが「イエスは罪人たちを迎えて、食事までしている」と批判をしたことに始まる。つまり、彼らは、望ましくない者たちに対するイエスの「伝道的」関心に反対したのである<sup>2)</sup>。

そして、「聖書物語」には、百頭の羊を飼っている羊飼いは、それぞれの名前が分かるほど羊のことをよく知っていたこと、いなくなった一頭を探すために必死で岩場や茂みを探しまわったことが記述されており、とうとう羊を見つけると、羊をきつく抱きしめて自分の家に戻ったという話である<sup>3)</sup>。そして、この羊の話を終えたイエスが律法学者たちの顔を見つめ、神にとっては神の助けを必要としない多くの人より、道に迷ったただひとりの人間の方が気がかりなのだ締めくくっている<sup>4)</sup>。この箇所は、ルカ 15：7の「言っておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない99人の正しい人よりも大きな喜びが天にある。」に沿っている。

本研究では、紙芝居の作品の内容についての分析が中心であり、これらを保育そのものに用いることについては触れることはできなかった。この点については今後の課題である。

**<引用文献>**

- 1) レオン・モリス著、岡本昭世訳『ティンデル聖書注解 ルカの福音書』いのちのことば社、2014、p. 310
- 2) R・Tフランス著、山口 昇訳『ティンデル聖書注解 マタイの福音書』いのちのことば社、2011、p. 365
- 3) レギーネ・シントラー作・下田尾治郎訳『聖書物語』福音館書店、1999、p. 227
- 4) 同上、p. 227

**<参考文献>**

- ・『聖書』新共同訳、1987
- ・レギーネ・シントラー、加藤善治・茂 純子・上田哲世訳『希望への教育 子どもとキリスト教』日本基督教団出版局、1992
- ・赤崎ユリ子・尾上明子・茂 純子・松浦八恵子『キリスト教保育を学ぶ方のために レギーネ・シントラーの「希望へと育む」～要約と解説～』名古屋聖文舎（取り扱い）、pp.14 - 15、2004
- ・柴田智世、尾上明子「キリスト教紙芝居における福音的観点からの考察－新約聖書を中心に－」『名古屋柳城短期大学紀要』第 36 号、pp.71 - 83、2014
- ・尾上明子、柴田智世「キリスト教紙芝居における福音的観点からの考察（2）－クリスマス物語を中心に－」『名古屋柳城短期大学紀要』第 37 号、pp.55 - 67、2015
- ・柴田智世「キリスト教紙芝居における福音的観点からの考察（3）－ノアの箱舟の物語を中心に－」『名古屋柳城短期大学紀要』第 38 号、pp.127 - 137、2016

## **A Study on Christian Kamishibai from an Evangelical Perspective(4): With a Focus on the Work Which Handled a Sheep**

Shibata, Tomoyo\*

本研究では、キリスト教の福音紙芝居を保育に取り入れる際の一つの方向性として、羊を扱った紙芝居作品を取り上げ、聖書に基づいた内容の分析と、子どもに語る際の聖書からの福音的視点を示すことを目的として研究を行った。

その結果、全ての作品において聖書の記述に従った内容構成で書かれており、読み手である子どもたちに福音的なメッセージ性をもつものであった。課題としては、特にキリスト教主義の園においては、当該聖書箇所の意味を子どもに伝えるとともに、紙芝居の有効的な活用の方法を提示していくことである。

キーワード：紙芝居, 聖書, キリスト教, 羊